

## 原版と銅版画作品のアーカイブ

### 2021 年度活動報告

本年度は美術家・今村源氏との作品制作を主に研究しました。氏は机や冷蔵庫、椅子や扇風機といった日用品などを使用しつつ、既存の価値観をゆさぶるような浮遊感溢れる彫刻を制作することで知られています。近年は「連菌術」というタイトルで目に見えない世界をユーモアを交えて可視化するようなインスタレーションを展開するなど、不可視の世界にこそ自然界を動かすような重要な法則が潜んでいることを指し示す、大きなスケールの制作を展開しています。本研究では、氏が日頃から関心を抱く「連菌術」というテーマの元になったキノコが存在を主軸として、銅版画を制作することに決定しました。制作を始めた当初から、地上と地下に共生関係を築く不思議なキノコ特性、地下に菌糸を張り巡らし、ときおり地上に姿を現すキノコの共生関係を銅版画制作に活かすことが話し合われました。キノコ研究者であり美術家の堀博美氏を招きレクチャーを開催し、キノコについての知識だけではなく、それらを作品として活かしていくための方法や制作過程を拝聴しました。また菌類研究会の活動にも参加し、学生たちと実際に山に入りたくさんのキノコを観察して専門家の講義を拝聴しました。その結果、本学の学生に参加してもらって銅版画作品を制作するだけでなく、モチーフとなるキノコにまつわる様々な情報も含めて作品化したいとの方向性が決まり、主に2回生銅版画基礎の授業で学生と作品制作を行いました。参加者たち各々に思う場所でキノコを採取してもらい、その採取場所や観察した内容や状況などを記録し、銅版画にて制作してもらいました。技法的にはドライポイント・エッチング・アクアチントを元に30点以上の作品が集まりましたが、それらの銅版画作品をキノコの傘の形を模したような丸い版用紙に刷り、様々な情報と共に銅版画部分が完成しました。今後、集まった銅版画を元に、キノコ型展示台を作成し、そのキノコにまつわる情報や記録を地図として描き起こす作業とともに完成する予定になっています。以下、今村源氏の文章を記載します。

「キノコを見つけるにはキノコ目というのが必要である。普段の歩く視線をぐっと下げて地面を注視し、時にはしゃがみこんで低い視点から探す。そんなキノコ目を備えると意外に身近なところにもキノコは出没していることに気づく。山や森だけでなく街中にもひっそりと息づいている。こんなキノコとの出会いの驚きや喜びを、銅版画という多彩で繊細な表現方法を用いて表現してみる。そのユーモラスな形態や細かい構造を表すには銅版画の緻密な線や細やかさがよく合う。写真やスケッチ、メモも加えてひとときの出会いを留めていく。キノコは一晩で成長、一日で消えてしまうこともあり、その出会いは限られたタイミングになる。季節や場所も重要で毎年必ず出会えるようなこともあるが、ある時忽然と家のプランターに顔を表すこともあり神出鬼没なところもまた面白い。その一瞬の出会いを残したい衝動にかられる。図鑑やネット情報でどんなキノコかを同定してみるのもまた面白い。だが、まだまだ解明されていないキノコも多く、その生態も含めて興味は尽きない。

こんなキノコとの体験記録を銅版画の技法を伴って集めてみる。その形態や周辺状況、その色や匂い、季節や場所などの情報を添えたものが、多くの人の参加によって時には図鑑のような集まりとして、場所の地図のような集まりとして違った魅力を放ってくることを期待したい。—今村源

大西伸明（美術学部教授）



学生が制作した銅版画